

山家悠紀夫『景気とは何だろうか』岩波新書 2005 年

第 4 章 戦後日本の景気循環(2)

疑問点・論点

日本では、1997 年から 2004 年の 7 年を通して、家計部門の需要が一度として低迷を脱しえなかった。P126「こうした家計部門の需要の弱さの最大の原因は所得の減少にある」とあるが、これに大きく影響を与えたものとして、「構造改革」の思想が挙げられる。この思想は、1990 年代前半まではあった景気の自律的拡張のメカニズム、そして「信頼の構造」を壊す一つのきっかけとなった。どうしてこのような思想が唱えられ、広く世間に流布していったのだろうか。

A

企業が倒産しないために、事業収益を上昇させるのに躍起になっていたから。
積極策を持ったものとして、市場に評価され株価は上がるようになった。そうすることにより、内部留保が増えて企業が安定化するから。

C から：

収益が上がってもそれを賃上げなどの形で従業員に報いない (P126) という点についてどう思うか。

B

1991 年から 93 年のバブル崩壊に伴って発生した不良債権を背景として、企業価値がさがって、企業が倒産することがあっては元も子もないという考えに傾いていたから。

D から：

自分の企業のことだけを考えては日本経済の成長にはつながらないのではないか。

C

企業同士が競争して、市場価値を高めることにより、景気をさらに良くしたかったから。

B から：どのような点で景気が良くなったか、具体的に教えてほしい。

D

コストを抑えるため、政府の介入を少なくし市場競争を重視することで、経済を良くしようとした。

A から：「コスト」とは具体的に何か。人件費も含むのか。